

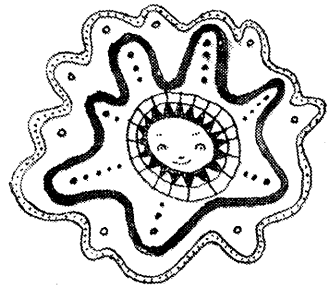
若いお母さんたちへ

「はるにれの会」プレイルームのお母様
たちのメッセージ

今回は二年目の「はるにれの会」プレイルームに参加して下さいだったお母様二人に、最近感じたり思ったりしていらっしやることを書いて頂きました。

岸沢さんは、新しい町、清新町に引越されてから、子育てを通じてその地域になじんで行く様子を書かれています。大都會での子育て。その地域も御多分にもれず、入れ替りのかなりある不安定な社会のようです。しかしだからこそ、今を、今の関係を大切に育てて地域に根付いたものにしていきたいという願いが、行間に溢れています。

そして大沢さん。一家の精神的支え手だったお舅さんを亡くされた前後の様子を、御自分の仕事が辞められ、主婦に戻られた経緯とからませて書かれています。家庭と仕事、女が生きていくうえで、避けることのできないこの問題が、読み手に迫って来るように思わ



れます。

この五月、プレイルームは三年目を迎えます。月二回の集まりではありますが、子育ての時を大切に、その時だからこそ考えられることを皆で考え、深めてゆかれたらと思っています。そして子ども達も楽しく過ごせる場に出来たらと願っています。御一緒下さる方は非御一報下さいますように。

連絡先 03 (466) 0465 入江

新しい町で

岸 沢 藤 子

十月三十一日

「あっ、みつけた」「ほら、ここにもあった」「ぼうしばかりねエ」「草の中ようくさがしてごらん」

集めたドングりをポケットに入れるM子（二才三ヶ月）、しっかりビニール袋に集めるK子（三才四ヶ月）、私がみつけたドングりをいち早くもらいにくるS子（三

才五ヶ月）、拾っては落して執着しない我が子S（二才十一ヶ月）

S「ドングリコロコロ……」と歌い始め、大人も子供もそれに続いて歌い出す。小さな大合唱がお山にこだまする秋の一日、のどかな時間が流れてゆく。

私の住む町、清新町は、浅瀬を埋めたてて計画的に作られ、昭和五十八年から入居が始まったばかりの高層住宅地です。四階建てから二十三階建てまで高低をとりまぜ、公園や緑道もたつぷりとしてあるとはいえ、自分の育った環境とかけ離れた街並みに、越してきた当時

は、こんなところで普通の子育てができるかしらと心配でした。

そして、その年の秋、我が家にも長男Sが誕生しました。

子供が生まれてみると、意外にここは、子供を育てやすいところに思えてきました。というのは、新しい町だけに、若い人が多く、子供にちょうどよい遊び友達が大勢いるのです。

晴れた日は、自然と公園に子供が集まってきました。町の中に大きな公園も四つあるのですが、近頃、私とSはもっぱら一番近くにある小さなお砂場公園に通っています。直径10m位の丸いお砂場の中にすべり台、ブランコ、雲梯などが点在し、そのぐらりにはベンチや椅子が並んでいます。さらにその後ろが小高い山になっていて、そこにドングリの木も五本立っています。そのうちの二本が、うれしいことに入居三年半たった今年初めて実をつけて、前述のドングリ拾いができるようになったのです。

ぽかぽかと暖かい日ざしを受けて、子供たちは砂山を作り、三輪車で公園のぐるりを回り、小山を駆け上り、ブランコをこぐ。そうやって遊んでいるようすを見ると、ああ、こんなコンクリートに囲まれた町でも、あたりまえの子育てができるんだと、何だかほっとした気持ちになります。親の目の届く大きさと、近くに車道もないこの公園で、親も子もゆったりりのびのびとすごせるのは幸いなことです。

そうした今まで通りの子育ての一方で、たぶん昔と違うのは、母親達が自分のやりたいことを切り捨てずにやり始めていることではないでしょうか。私も友達二人を誘ってパン教室に通っていますが、Sは、仲良しのA子（二十ヶ月）やY（二十ヶ月）と遊び、母親三人はパンを習いとそれぞれが充実した時間をすごせるようになってきました。Sにとってもパンの先生の家は、目新しいおもちゃがあり、小学校・幼稚園に通うお兄ちゃんお姉ちゃんにも遊んでもらえる新鮮で楽しみな場所となってきました。

さらに、町にあるコミュニティー会館を中心にして、テニス、洋裁、あみものなどのサークルを、母親達が自主的に作り、運営し、そこで子供達は、ふだん遊ばない友達とも広く遊ぶ機会を得ています。二才代位になってくると、友達を求める気持ちも強くなってくるせい、か、だいが母親から離れて遊べるようになってきます。ただ、母親も自分達のことによって夢中になって子供に目が届かなくなる心配がだんだんに出てきて、事故を起こさないように気を引きしめなくてはと思います。

雨の降る日は、仲の良い家に寄り集まってケーキやパンを焼いたり、子供のおもちやを手作りしたりと、一日があっという間に過ぎてゆきます。雨や雪の日でも傘なしでお互いの家を行き来できるのは、集合住宅の便利なのところかしらと 생각합니다。

このように晴れた日は公園が、雨の日は電話が、サークルが糸口となって家庭同志の交流ができ、孤独な子育てをしないですんでいます。重い扉一枚閉ざせば、没交渉で暮らすことも都会生活では可能なことだと思っています

が、外に向けて扉を開けて、家庭を開放的にしておけば、親も子も楽しく子育てができます。もし、子供がいなかったら、こうやって多くの人と友達になることも、あれこれ教え合うこともなかっただろうな、子供がいるからこそ、人間関係が広がり、新しいことにも挑戦していけるのだと思います。

こうやって同じ年頃の子供達をみていると、自分の子供と同じことが他の子供にも同じ時期にあらわれて、人間の発達は共通しているものだなあと安心して子供の状態を見守れたり、男の子と女の子の違いが、育て方に関係なく現われてくるようで、そのことをみんなでおもしろがって子育てすることができました。

たとえば、おむつがとれてしばらくしてからのこと、SやYはやたらパンツにおしっこをちびるようになり、A子はおもらしをするようになって、これはどうしたことだろう、後戻りだろうかとみんなで悩んでいました。そのうちに、これはどうも、おしっこをがまんできる限界に挑んでいるようだと思つて「子供は親の考えをは

るかに越えたことを考えている」(A子の母親の言葉)

と驚き合ったものです。こんな簡単なことも、はじめての子供を育てる私達にはなかなかわからずに、やっとおむつの洗濯がなくなったのに、一日にパンツを五枚も六枚も取り替えるのでは同じではないかと不満に思ったりしたのです。足踏みをし、足をこすり合わせてがまんしているSに、「おしっこじゃないの?」と問うと、絶対に「いや!」「だめっ!」の返事。「おしっこ」と言いかけて、「おしっ……り」と言つてにやっと笑う。私が「ああ、そう」と無関心を装うと、ようやく「おしっこ!」とトイレに駆け込んでいきます。「自分」は「自分の意志」で動くのであって「人の意志」で動くのではない……と、自律の時期は自我の成長、はじめる時期なのではないか。

こうやって、気のおけない仲間が近くにいて、子育てできるというのは、核家族の家庭では、本当に心強いものです。秋口、私に喘息の発作が起きた時、「Sちゃんあずかってあげるわ」と一日みてくれた人、Sを公園に

連れ出してくれた人、晩ごはんのさし入れをくださった人と子育て仲間にずいぶん助けられました。

この仲間も、いつ転勤があつて、引越していつてしまふかもわからない不安定な都会の地域社会ですが、それだからといって利那的になるのではなく、ここを愛し育くんで、地域にしっかり根づいた子育てをしていきたいと願っています。

義父を失って

大沢啓子

昨年五月、私たち一家は、大黒柱である「おじいちゃん」を失った。この思い出は、私にとって今だ生々しく、とても文章になどならないことであるが、この原稿をおひきうけたのを機会に、気持ちの整理をさせてい

ただくことにした。

当時、我家は義父（七十才）、夫（三十八才）、私（三十六才）、長女・茜（六才）、長男・亮（二才）の五人家族。義父の優しくまめな援助に支えられながら、夫婦共働きの忙しい生活を何とかこなしてきた。

暮れから体調をくずしていた義父が、一月末に入院。

この日から、夫と夫の姉、私の三人が交代で病院に通うことになった。完全看護の病院なので毎日行く必要はないのだが、入院している義父の不安と寂しさを見ると、少しの時間でも、顔を見るだけでもいいから行ってあげたかった。仕事を早退し、子ども達を連れてぞろぞろと病院へ行く。義父は、孫のくるのをとても楽しみに待っていて、ジュースや飴などを用意してしてくれた。二月に入り外科病棟へ移り、ようやく手術の日程が決まる。いざ手術となると、不安が大きいのしかかる。夫も義父も、神経がビリビリしていた。三月半ばに手術。結果は良くない。手のほどこしようもなく病巣が広がってい

た。術後の経過も悪く、三日間死線をさまよった。なんとか意識を取り戻したが、その後、寝たきりの状態が続き、そのまま死までの一ヶ月半を過す結果となった。

一番つらい思いをしたのが夫である。同じ家に住んでいながら、親の病気に気がつかなかった事への後悔。親との別れは特別の寂しさであろう。手術の結果が悪かったこともあり、覚悟はしていたものの、死が現実となると、あれもこれもやってあげられたのではと後悔の連続であったようだ。葬儀も無事に終え、ほっとした所で眠れぬ夜が続いた。義父がいた時には、夫は二人の子の親でありながら、自分も子どもでいられる部分があった。

この家とは義父まかせで、気楽でいられた。これからは家族を守るといふ責任を果たさなければならぬ。「自分達がしっかりとした考えを持っていれば、まわりからいろいろ言われることはない」と言ったことがある。親という風よけがなくなり、世の中の空気が強い風のように思われたのか。三十八才で両親ともなくし、寂しい限りであるが、これをのり越え、両親から学んだ優しさと

真面目さを、今度は自分が親として子ども達に伝えていくことであらう。

子ども達も多くの経験をした。

長女・茜。生後八ヶ月から昨年三月まで、私の職場に近い、板橋区の西台保育園に通っていた。東京にもまだこんな所が残っていたのかと思う程の田園地帯で、茜は、畑や緑に囲まれた季節感豊かな自然環境の中でのんびりと育つことができた。ところが四月になり小学校の入学と同時に、生活は百八十度の転換。学校が終わると学童保育。五時以後は近所のお宅に二重保育をお願いした。友達もなく、初めての生活にどれだけ神経を使う毎日であったであらう。それに加えて義父の病气、家の中は落ちつかない。茜は茜なりに、明るくふるまい、一人でよく頑張ってくれた。

偶然の事だが、茜は義父の臨終の時も立合った。これは敏感な茜にとって、非常に残酷な体験であった。葬儀の時には誰よりも泣いた。大好きだったおじいちゃんと別れに泣いて泣いた。

茜は今でも家族の人数を数える時、おじいちゃんも仲間に入れる。義父は茜の心にいつまでも生きている。

長男・亮。姉と同じ保育園の一寸児組に通っていた。

幼ない亮にとっても、この事態は異常に映っていたにちがいない。早朝から保育園に預けられたり、お迎えはお母さんではなく、板橋（実家）のおじいちゃん、板橋の実家で夕食を食べ、お母さんの帰りを待つ。四月からは、お姉ちゃんと離れ、一人で待つ生活に変わった。保育園の先生方、実家の両親や姉一家がとても協力してくれ、亮が不安のないようにと心がけてくれたおかげで、病气もせず落ち着いて過ごせた。緊張した生活が一ヶ月続き、ついに水疱瘡でダウン。幸い軽くてすんだが、保育園は登園禁止。亮にも休養が必要だったのだろう。

亮にとっては訳も解らず過ぎた葬儀だったが、印象は強烈だった。特に火葬場での経験は二才の亮に「死」のイメージを強烈に焼きつけた。「おじいちゃん、やけどしたんだよ」やけどすることは、とてもこわいことだった。大好きなおじいちゃんに、もう会えない。

亮はよく仏壇の前でチンと鈴をならし、手を合わせる。遊びのように見えるが、あの中におじいちゃんがいることを知っている。

私も生活を変えた。十年間勤めた学童保育クラブの仕事辞めた。結婚、二度の出産、育児と大変な時期をなんとかのり越え、仕事への欲もでてきただけに、そう簡単に決心のつく事ではなかった。病気の義父や夫や義姉のことを考えると辞めた方がよい。職場では上司や同僚が仕事を続けられるように協力し支えてくれた。なんとか頑張らなくては。夫は、先のない親のために私の生き方を変えてくれとは言わなかった。辞めるなら子どものために辞める。子どものためには辞めない。子ども達だって保育園で頑張っているのに……。それを今さら……。そんな事言ったら、今まで私がしてきた事は何だったのか。辞めれば皆が楽になる。しかし、今辞めても私は義父のために何もしてあげれない。思いはぐるぐるまわりをするばかりであった。そして、幼稚園↓職場↓病院↓実家↓我家をまわる生活をするずっと続け、三週

間悩み続けて決心。それから一ヶ月後、休暇を使い果たしまわりに迷惑をかけながらの退職となった。

義父の看病が一番ではあったが、これから先の家族を大切にしたいという気持ちは大きかった。このことで夫との信頼関係をこわしたくない、というのが本音かもしれない。

五月九日、退職後わずか九日で義父は亡くなった。私が十年間仕事を続けられたのは、義父の助けがとても大きかった。助けられるばかりで、とうとう何も助けてあげられなくてごめんさい。おとうさん……。

四十九日の納骨も終わり、これからが私達四人の新しい出発である。しかし心の方はまだまだスタートできない四人だった。何もしない、何もできない夫。家の中では何の役割もとうろとししない。全て私まかせである。全てをおしつけられた私も、生活感覚の変化による体の不調やいらいら。葬儀の後始末や子ども達の問題も重なり疲れがどっと出る。精神的にも肉体的にも最悪の状態で

あった。子ども達にも良い影響が出る訳がない。茜は再び喘息に苦しむ。私が仕事を辞めれば治るのではと思っただけにショックだった。亮は、お母さんと一緒にいる生活に満足だった。でもうれしい事ばかりではない。三才のいたずら盛りで叱られる事も多い。今までよりお母さんと接する時間が長くなった分、叱られる場面も多くなった。私の方も「又か」とうんざりする事が続き、きつと怖い顔をしていたのだろう。何気なく亮と目が合った時に「お母さん、亮クンのことおこっているの？ おこらないで！」と言われた。何で叱られているのがわからず、亮にはただお母さんの怖い顔ばかり目に映った。

義父の死から九ヶ月。我家はようやく親子四人の生活のペースをつかみ始めた。

夫は以前の会社人間にもどり、家では子ども達の良き父親である。子ども達も落ち着きを取り戻した。亮は相変わらずにはにかみ屋だが、ゆっくりと自分のペースで

生活の範囲を広げている。四人それぞれの思いのある一年であった。家族が死ぬという事は、子どもにとってあまり経験することではない。この悲しみと頑張りを忘れることなく成長してほしい。

私も子ども達に負けずに頑張ろう。仕事を辞めて手にしたこの貴重な時間。家族思いだった義父が私にくれた贈り物として、家族のために大切に使おう。そうする事により、義父の思いは孫である子ども達にひきつがれていくことであろう。